

かざ

ぐるま

# 風車

紀州の歴史と文化の風

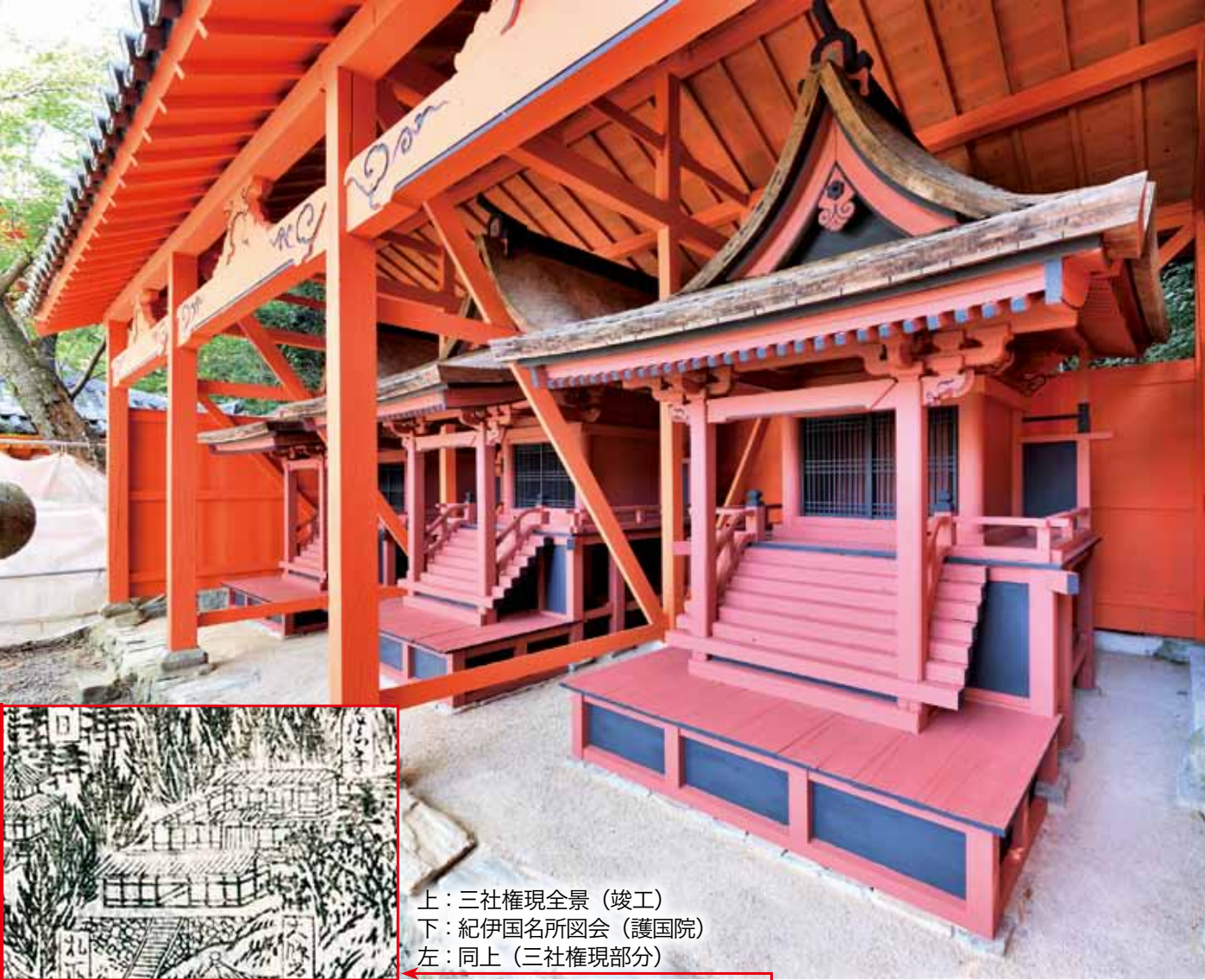
文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2020 夏号

# 91

公益財団法人 和歌山県文化財センター

## 特集 護国院三社権現の保存修理



上：三社権現全景（竣工）  
 下：紀伊国名所図会（護国院）  
 左：同上（三社権現部分）





# 特集 護国院三社権現の保存修理

## はじめに

正式名称は「紀三井山金剛宝寺護国院」ですが、通称である「紀三井寺」の方がなじみ深いでしょうか。渡来僧の為光上人によって宝亀元年（七七〇）に開創されたと伝わることから、今年が開創一二五〇年のメモリアルイヤーになります。西国三十三所観音霊場の第二番目札所、早咲き桜や標準木がある桜の名所、日本名水百選に選ばれた吉祥水、清浄水、楊柳水が寺名の由来になっていること、景勝地和歌の浦を望む眺望と、反対に和歌の浦からも遠望できる建物群、紀ノ国屋文左衛門に因む結縁坂など、名所たる所以には枚挙に暇がありません。

建造物では、楼門（永正六年・一五〇九）、多宝塔（文安六年・一四四九）、鐘楼（天正一六年・一五八八）の三棟が重要文化財に指定されており、江戸時代に建てられた、本堂（宝暦九年・一七五九）や開山堂、六角堂、大師堂（寛政十一年・一七九九）、三社権現（三棟）、書院の八棟が県指定文化財となっています。

一六世紀後半の製作とされる「紀三井寺参詣曼荼羅」（和歌山市指定文化財、以下「参詣曼荼羅」）をみると、重要文化財の三棟が同位置に描かれており、中世期の境内の様子を垣間見ることができます。また、江戸時代末期に製作された「紀伊国名所図会」（表紙下、以下「名所図会」）では、県指定建造物も含めて描かれており、現在と大差のない寺観が認められます。

令和元年度から、県指定文化財建造物である開山堂ほか五棟の保存修理事業が開始されました。今号では、そのなかでも中心的な工事である三社権現の修理に焦点を当て、本特集のほか、短信、コラムでも紹介します。

## 三社権現について

本堂が建つ名草山中腹から更に石段を登ると南北に細長い平坦地があり、南から順に三社権現、多宝塔、開山堂が並びます。三社権現は多宝塔などが建つ地盤よりもさらに一段上がった場所にあり、覆い屋の中で西側の海に向かい、南から順に金剛蔵王権現、熊野三所権現、白山妙理権現の三棟が南北に並び

建ちます。三棟は比較的小規模な一間社隅木入り春日造と呼ばれる形式で、同規模、同型式に造られています。建立年代は資料がないため不明ですが、これまでの調査では細部の様式などから一七世紀後半頃と推測されました。

「参詣曼荼羅」（写真1）を見ると、形式が少し異なるものの、三棟の小規模な社殿が並んで描かれています（矢印位置）。本堂や多宝塔との位置関係などから、現在の三社権現と同位置である可能性が高いと考えられます。「名所図会」でも「鎮守祠・ちんじゅやしる（原文ママ）」として現在と同位置に描かれており、覆い屋と共に現在には存在しない拝殿と思われる建物も描かれています（表紙左）。この拝殿は古写真でも確認出来ること



写真1 紀三井寺参詣曼荼羅 境内中心部分

から、比較的近年まで存在したようです。現在の覆い屋は近年に建て替えられたものですが、少なくとも江戸時代末期から同様の覆い屋が存在したことが判ります。また、周囲を囲む塀や、正面側には門も描かれています。

お寺のなかに「神社」があることに違和感を受ける方もおられるかもしれませんが、江戸時代までは「神仏混淆（こんぶこんごう）（習合）」という思想が一般的で、特に珍しいことではありませんでした。護国院でも鎮守社が大切に祀られてきたことは名所図会からもよくわかります。

## 修理工事について

覆い屋で護られていることから、風雨による破損の進行は緩やかになるものの、白アリは例外でした。以前より蟻害（ぎがい）が大きく進行しており、建物の存続が危機的な状況にまで破損が進行していたため、この度解体修理を実施する運びとなりました。柱や壁板、長押（ながし）、貫など、桁から下の軸部は原形を留めないほどに蟻害が進行していましたが、桁より上部の軒廻りや屋根のこけら葺きなどは比較的健全な状態でした。通常の解体修理では、屋根から順番に、建てる時とは逆の順序で一つずつ丁寧に部材を分解し、破損したものは補修や取り替えを行い、出来るだけ元の部材を再用して元通りに組み立てます。今回も軸部の破損が大きく、全体を分解して修理を行う必

要がありました。出来るだけ分解範囲を少なくするため、比較的状态が良かった桁から上の屋根部分は分解せず、一旦持ち上げた状態で仮に支持し（大ばらし）、その間に桁より下の解体修理を行う手法を採用しました。金物主体ではなく、木組みで建物を組み上げてゆく伝統木造建築ならではの修理法といえます。

逆説的になりますが、修理には必要となる分解も、不用意に行うと破壊につながります。



写真2 三社権現（熊野三所権現）の背側面 特に壁板や土台などが蟻害を受けていた

分解することで部材が破損し、修理範囲や取替材が増加することもあるのです。文化財修理では、大切なオリジナルの部材を、できる限り多く次世代に引き渡すため、分解範囲を極力減らすことが求められます。そしてそれは、予算の圧縮にも役立ちます。一方で、修理（分解）に伴う調査により、普段では知り得ない情報を得られることがあり、建物の由来や沿革などを知る重要な手がかりとなります。今回の調査では、建立年代を明確に示す



写真3 屋根部分を持ち上げ（揚屋）て軸部を分解した状況  
表紙上写真と同位置より撮影



資料は発見できませんでしたが、様々な発見により建物の改変履歴が概ね判明しました。

## 改変履歴について

調査によって、建立当初は現在とは外観が大きく異なっていたことが判りました。元は今よりも緩い屋根勾配であったものを、後世の修理で棟高を上げて屋根勾配を急に改変され、脇障子や高欄、木階を新たに付け加えられていました。さらに修理時期は、鬼板に付く輪宝金具裏面の墨書より宝永三年（一七〇六）と判明しました。これにより、建立時期は想定よりも少し遡る可能性が高く、一七世紀前半頃でも良いと考えられます。

大きな修理は昭和期にも行われていました。昭和二五年にジェーン台風による被害を受けた多宝塔が翌年から修理されています。多宝塔に最も近い白山妙理権現も被害があったのか、同時に解体修理が為されており、多くの部材が取り替えられました。この時点では三社権現は文化財の指定を受けていませんでしたが、多宝塔の修理に関わった大工で、後に建造物木工の選定保存技術保持者となる故松浦昭次氏が修理を担当したことも判明しました。そのこともあってか、白山妙理権現は取り替え材が多い割に旧状をよく残した、良い修理がされていました。現状のこけ

ら屋根は三社殿で共通することから、他の二棟についてもこの時期に屋根が葺き替えられていると考えられます。

現状の塗装仕様も三棟で共通しており、白山妙理権現社は塗装が現状の一回のみであることから、昭和二七年の施工であることが判ります。詳細に見ると、材料の木口には黄土、板類には胡粉、その他は鉛丹系赤色塗料が塗られていました。これまでの和歌山県内の事例より、鉛丹や黄土は近年の改変による場合が多いことから、現状塗装の下に残る塗装痕跡を注意深く観察しました。すると、元々は黄土や胡粉が使われておらず、酸化鉄系赤色塗料（X線回折分析により確認）と墨塗りのみであったことが判りました。実はこの配色は、平成一九年の修理の際に判明した多宝塔、鐘楼、楼門の旧塗装と一部が共通します。赤色と黒色のみ塗装は、現在の感覚では異質に感じるかもしれませんが、江戸時代には一般的に用いられていた、地方色の豊かな塗装と考えられます。

正面側の建具も、現状では近年に作り替えられた、建物に不相応なものが入っていたため、本来の形状を推測して新調しました。詳細はコラムをご覧ください。

「参詣曼荼羅」で描かれている三社権現は本当に現在地に建っていたのだろうか、という疑問を解決するため、基壇の発掘調査を行

いました。これも建物がない状態ではできないため、修理における成果とも言えます。その結果、現在の建物が建つ基壇の下に、一回り小さい基壇のような遺構があり、前身建物の存在が示唆されました。また、宝永の改変に伴って掻き落とされた塗料が現状地盤より少し下で検出されるなど、建物の所見とリンクする知見も得られました。調査は当センターの埋蔵文化財課が実施しました。詳細は短信をご覧ください。

今回の修理に伴う調査により、上述の通り様々な新発見がありました。その成果をどこまで今回の修理工事に反映すべき(できる)か検討した結果、明らかに近年の改変と判明した箇所のみ旧来の姿に戻すこととなりました。具体的には、江戸時代に改変された屋根形状や縁廻りなどはそのままの姿で残し、昭和二七年の改変と判明した塗装や建具、基礎などを元の姿に復しました。

三社権現は、今後外構整備などが行われ、今秋にお披露目される予定です。昨今のコロナ禍により、大手を振ってお越しくださいと喧伝出来ないことは菌痒いのですが、紀三井寺にご参拝の折には、和歌の浦を見下ろす名草山中腹にひっそりと佇む鎮守社にも足を運んでいただけると幸いです。

(結城 啓司)

用語解説

●鉛丹とは…四酸化三鉛を主成分とする赤色塗料。オレンジ色系の鮮やかな発色を呈するが、変色しやすいことから、かつては現在ほど多用されていなかった  
 ●酸化鉄系塗料とは…第二酸化鉄を主成分とする赤色塗料。落ち着いた赤味を呈する。非常に安定した物質であり、建物の塗装に多く使われていた。丹土、弁柄ともいう。



写真 5

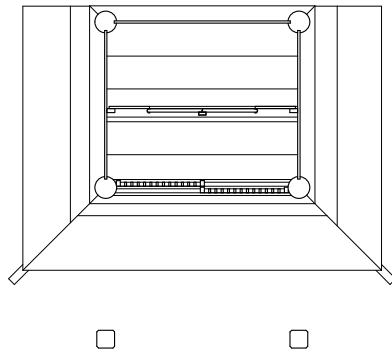


写真 4

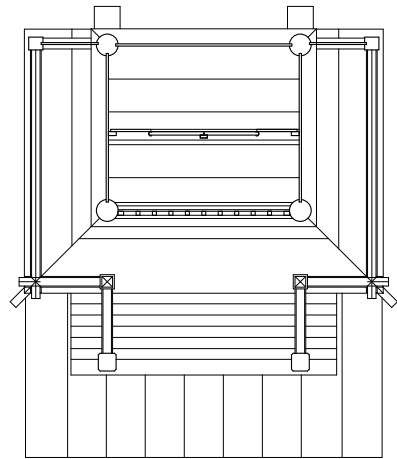


写真 6

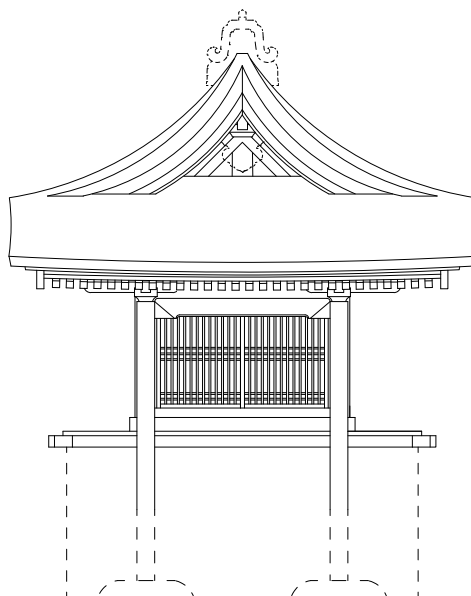
写真 4：軒廻りの塗装痕跡。黄土（白く変色）塗装の下や破風や垂木の木口に黒色塗装の痕跡がみえる。  
 写真 5：輪宝金具裏の墨書。「宝永三年」の年号が確認できる。  
 写真 6：鬼板に輪宝金具が取り付けいた状態。



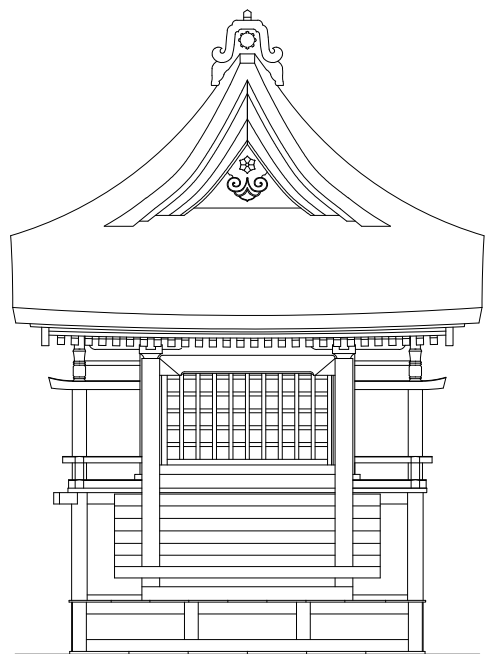
当初復原平面図



修理前平面図



当初復原正面図  
 ※点線部分は不明箇所



修理前正面図



## 護国院三社権現基壇の発掘調査

特集記事でも紹介がありました。三社権現の解体修理を機に、当センターでは基壇（社殿の土台）の発掘調査を行いました。今回の発掘調査の目的は、礎石の配置や土層の堆積状況を確認することで、現在の建物の礎石を設置した状況やそれ以前の改修に関する情報を得るためのものです。対象である基壇は建物の修復後も使用されるため、調査の範囲を最小限にとどめる必要もあり、三つの社殿の中心と礎石の真下を通るようにし字の調査区を設定して調査を行いました。

発掘調査の結果、現代までに大きく3回の改修を受けていることが分かりました。

現代より一段階前の姿は、宝永3年（一七〇六）の改修によるものとみられます。

この改修については特集で紹介された通りですが、発掘調査では、社殿の屋根の外側にあたる地表面から古い塗装を掻き落として赤くなったと思われる土が現れました。この赤い土は後に化粧土と思われる不純物の

の少ない土で人工的に覆われており、掻き落とした塗装を隠していたとみられます。

二段階前の姿は、江戸時代前期頃に基壇が現在の規模に拡張され、現在の礎石と建物が建てられた時期のものと思われる。

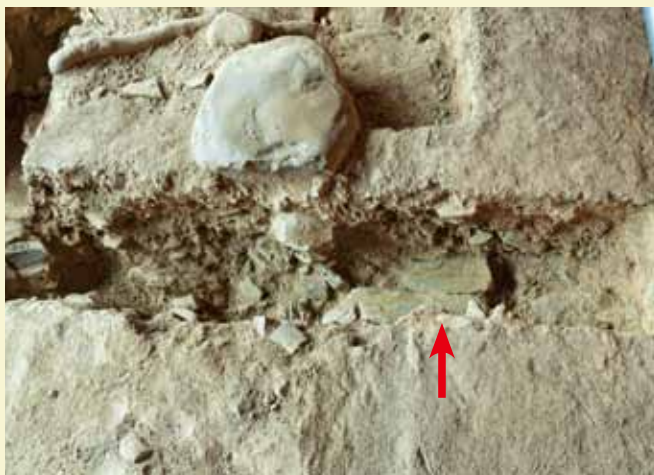
一方で、屋根のほぼ真下にあたる社殿の南北両側では、現在には見られない石列が確認されました。この石列は、軒先から雨が落ちる箇所を並べ、地面が穿たれるのを防ぐ雨落ち、もしくは基壇上面の化粧石



金剛蔵王権現基壇調査状況（西から）

の可能性があります。

三段階前の姿は、江戸時代前期より前の基壇のものです。基壇の端とみられる石列が現在の基壇よりも内側で見つかったため、当時の基壇は今より一回り小さかったとみられます。また、建物の位置や規模は現在と変わっていないと考え、当時は覆屋が無く、参詣曼荼羅のような姿を呈していたと考えられます。（森田 真由香）



江戸時代前期以前の基壇端とみられる石列（南から）



## 建具のはなし① 護国院三社権現 — 格子戸の復原検討 —

特集に関連して、護国院三社権現の正面建具について復原検討の過程を紹介いたします。まず前提として、現状の正面構えは二本溝の敷鴨居に対して、外側の溝のみを使用して嵌め殺しの格子戸が入っており、明らかにちぐはぐな状況でした。また、建具も近年製作された新しい物でした。そこで、本来はどのような形状の建具が入っていたのか、検討しました。とはいえ、柱や敷鴨居に痕跡などは残っておらず、建物自体に手がかりはありませんでした。

このような場合、類例と比べて地域や時代、用途、規模、形式などが近い建物を参考に検討します。今回は県内の重要文化財の神社本殿で、正面構えを引き違い戸とする（敷鴨居が入る）類例を抽出しました。すると、一七例全てが格子戸で、そのうち八割が細い格子を縦に密に配する「堅繁」の格子戸が入っていました。また、三社権現は規模が特に小さいため、近い規模の野上八幡宮の摂社に倣い復原案を作成しました。

建具は破損や使い勝手などから、後世に取り替えられ、後に復原されることが比較的多い部材です。そのため、建物と同時代の建具はとても貴重で、重要な情報をもっています。建物を見る際に古い建具が残っていないか、探してみると面白いかもしれません。

（結城 啓司）



熊野三所権現の正面側（竣工）



野上八幡宮玉垂社（報告書より）

## きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

### 埋蔵文化財課 どんなカタチ？

紀の川下流北岸に位置する西田井遺跡は、一般国道24号線（和歌山バイパス）建設に伴う発掘調査が昭和58年度から61年度にかけて行われ、縄文時代（古墳時代、平安時代）室町時代の遺構を検出し、多数の遺物が出土しました。今回は、この西田井遺跡で出土した遺物の中から、少し変わったものをご紹介しますと思います。

写真に写る三角形の黒い塊、これは西田井遺跡の弥生時代末～古墳時代初期の竪穴住居跡から出土した鉄器です。長い間土の中にあつたため大部分が錆びてしまつてわかりにくいのですが、矢じりや工具といった製品ではありません。報告書では「鉄素材片」と呼称されていますが、一体どういう性格の遺物なのでしょう？

諸説ありますが近年の研究成果によると、三角形の鉄素材片は板状の鉄素材から農具などの鉄器を作る際に、裁断して捨てられた破片ではないかと考えられています。日本列島で道具としての鉄器が作られるようになる（鍛冶）のは弥生時代以降ですが、その鉄器の元となる材料としての鉄が日本列島で作られるようになる（製鉄）のは、古墳時代後期以降と考えられています。

そのため、西田井遺跡で見つかったこの鉄片は、当時の日本列島では作られておらず、すでに製鉄が行われていた朝鮮半島からもたらされた鉄素材を加工した際の廃材と推測できます。

西田井遺跡でかつて生活していた人々は、遠く海外で作られた鉄素材をどのようにして入手し、どのようにして鉄器を作っていたのでしょうか？一見すると錆びた鉄の塊ですが、その中には当時の人々が行っていた交易や鉄器を作るための技術の手がかりが今も残っています。

（濱崎 範子）



西田井遺跡出土の鉄素材片

# 催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2020年夏～2020年秋)

## 和歌山県文化財センター

- 「紀州のあゆみ－和歌山県内埋蔵文化財発掘調査成果展－」  
2020年10月3日(土)～11月8日(日) 会場：有田市郷土資料館
- 「地宝のひびき ー和歌山県内文化財調査報告会ー」  
2020年11月1日(日) 13:00～16:40 場所：イオンモール和歌山3階 イオンホール  
定員50名(事前申込制) 無料
- 「歩いて知るきのくに歴史探訪 ～田辺城跡周辺の文化財を訪ねる～」  
2020年11月14日(土) 13:00～16:00 (荒天中止)  
定員30名(事前申込制) 無料

## 和歌山県立紀伊風土記の丘

- 秋期特別展「埴輪が語る古墳の祀り」 2020年10月3日(土)～12月6日(日)

## 和歌山県立博物館

- 企画展「喜多村進と徳川頼貞－南葵音楽文庫をめぐるひとびと－」  
2020年8月29日(土)～10月4日(日)

## 和歌山市立博物館

- ホール展示「写真で振り返る和歌山中央郵便局の前身『和歌山郵便局』」  
2020年9月1日(火)～9月27日(日)

## 高野山霊宝館

- 夏期企画展「如来 ー NYORAI ー」 2020年7月11日(土)～9月27日(日)
- 大師号下賜1100年記念大宝蔵展  
「高野山の名宝 皇室と高野山」 2020年10月3日(土)～12月6日(日)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。  
掲載内容から変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

### 目次

- 1 表紙「護国院三社権現全景(上)、紀伊国名所図会(下)、同：三社権現部分(左)」
- 2 特集「護国院三社権現の保存修理」
- 6 埋蔵文化財課 短信「護国院三社権現基壇の発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「建具のはなし①護国院三社権現 ー格子戸の復原検討ー」  
「どんなカタチ？」
- 8 催し物案内

## 風車91 (2020・夏号)

令和2年8月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1  
TEL 073-472-3710  
FAX 073-474-2270  
kanri-2@wabunse.or.jp